

認知の反すうに及ぼす代替思考、抑制の影響について  
置き換え攻撃の防止の観点から

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
森田 杏奈

本研究は、置き換えられた攻撃の形態の一つである、TDA (triggered displaced aggression) を防ぐことを目的として行われた。これは、怒りの反すうを媒介とし、些細な誘発事象によって、別の対象に攻撃が置き換えられるものである。これを防ぐために、不快事象に対する怒りの表出の形態と反すうに対する対処に着目した。その詳細を調べるため、対人葛藤における置き換え攻撃をテーマに、インタビューを通して半構造化面接で調査した。その結果、怒りの抑制が反すうに影響を与えること、反すうへの対処として、気分転換、話す、ということが主に用いられることが分かった。気分転換は、反すうの感情面の沈静化を促し、話すことは、認知面の沈静化を促していた。また、この認知面の沈静化にはプロセスが見られ、第一段階として、状況・状態の整理・理解を経る。第二段階として、自分の正当性、相手への非難などが行われる。第三段階として、出来事に対する最終的な意味づけがなされる。出来事に対する意味づけは、怒りの反すうを抑制する代替思考になっていると考えられた。この代替思考には、問題の所在は相手にあると見なす思考、問題によって自分が成長したと見なす、関連するポジティブな代替思考であった。

また、怒りの抑制の形態、反すうの抑制の形態から、主張を行わず、自己の視点でのみ怒りの処理を行う青年層の対人葛藤処理の特徴が表れた。これらの見解を基に TDA 防止のためには、怒りの表出、反すうを抑える代替思考に、相手への視点を入れたポジティブな代替思考が必要であると考えられた。